

げんでん
ふれあい **福井**

第21号

2005

SPRING



●第6回げんでんふるさと文化賞
芸術新人賞・受賞者の横顔

●ふるさと福井 由利公正 —特異な実践哲学—
人物シリーズ

●伝統行事 シリーズ 気比神社 春祭り・秋祭り 「みやあげ」神事

国民文化祭

に向け、文化大使に聞く

「文化の国体」と呼ばれる「第20回国民文化祭・ふくい2005」が、10月22日から11月3日まで、県内全市町村を会場に開かれます。大会コンセプト「糸」のもとに、全国から音楽、演劇、美術などさまざまな文化活動に親しんでいる人たちが集まり、日頃の成果を発表し合い、交流を深めます。

この大会のキャンペーン活動しておられる5人の文化大使に、アンケートを通じ、大会への抱負などを聞きました。



プレフェスティバル（平成16年10月24日・サンドーム福井）で大会への意気込みを披露した文化大使のみなさん

自然の恵みから生まれた食の豊かさ、福井の歴史の歩みから創り出された食文化の発達こそが、わが福井県のすばらしい文化、芸術の原点だと思います。食へるといふことは、物を創造していく上での源であり、その土地に根ざした文化・芸術を生み出していくのではないのでしょうか。

私は、かつて東京の劇団で培った演劇や歌などの知識、経験を生かし、マンツーマンから始まる地道なPR活動をベースに、福井の歴史や食文化の魅力ある情報を発信し、大使の大役を果たしたいと思っています。



北島 正徳さん
(あわら市)

歴史や食文化を発信



清水 美奈さん
(丸岡町)

演劇や歌でPRしたい

昨年開かれたプレ総合フェスティバルで公募された「新・ふくい和歌集」が発表されましたが、これを聞いて、福井ならではの心地よい温かな表現や言いまわしで、そこに住む人々の暮らしが、情景を豊かに表している、福井の良さを改めて、しみじみ感じました。

「国民文化祭・ふくい2005」は、半世紀に一度の大イベント。県全体で盛りあげていくために、一人でも多くの県民のみなさんに国民文化祭を知ってもらえるよう、演劇や歌で学んだ発声を活かして、PRしていきます。



財団シンボル
マーク

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

CONTENTS/21

■国民文化祭に向け、文化大使に聞く	2, 3
■第6回げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞受賞者の横顔	4, 5
■ふるさと福井・人物シリーズ 由利公正—特異な実践哲学—(上)	6, 7
■第7回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展	8, 9
■第25回近畿高等学校総合文化祭プレ総合同会式	10
■福井の文学碑シリーズ 藤野巖九郎と魯迅「惜別の碑」	11
■敦賀市立博物館ギャラリー／15 琴高仙人図・原在中筆	12
■伝統行事シリーズ 氣比神社春祭り・秋祭り 「みやあげ」神事(敦賀市刀根)	13
■情報ファイル (平成17年度財団事業計画決まる。)ほか	14, 15

FRONT COVER



敦賀市指定無形民俗文化財 氣比神社の春祭り・秋祭り 「みやあげ」神事

昨年の12月5日、敦賀市刀根区で、氣比神社の収穫感謝の神事「みやあげ」が行われました。その代表的行事として、早朝5時ごろから、にぎやかな餅つきが始まります。今回から、会場を区公会堂に変え、東座、西座にわかれ、それぞれ、餅つき、赤たまき姿の4人の男衆によって、餅つき唄にあわせて、勇壮な餅つきが始まり、餅がほほつきあがると杵棒の先に餅を挟んでたがだかを持ち上げるなどして、豊作に感謝します。

(本誌P13・伝統行事シリーズを参照ください。)

分野別開催市町村

福井・坂井地域

- 福井市
 - ★ オープニングパレード
 - シンポジウム(人と環境と文化、暮らしと精神文化)
 - ★ 吹奏楽の祭典
 - ★ マーチングバンド・パトワリングフェスティバル
 - ★ オーケストラの祭典
 - ★ 生活文化総合フェスティバル
 - 洋書フェスティバル ● 映像文化フェスティバル
 - 朝倉文化フェスティバル ● 美術展
 - ★ 閉会式・グランドフィナーレ
- あわら市
 - 日本舞踊の祭典
 - 現代美術展
- 美山町
 - 越前・若狭食の祭典(そば街道 美山郷から)
- 松岡町
 - まつおか人形劇カーニバル
- 永平寺町
 - 茶道フェスティバル
- 上志比村
 - 室内楽の祭典(ハーブ)
- 三国町
 - 現代美術展、文芸祭「演詩」
- 丸岡町
 - 詩歌と手紙のメッセージ展
- 春江町
 - 室内楽の祭典(大正琴)
- 坂井町
 - 文芸祭「川柳」

奥越地域

- 大野市
 - 民謡・民舞の祭典
 - さっさとLIVE in ONO
- 勝山市
 - IT文化フェスティバル
 - 恐竜文化フェスティバル
- 和泉村
 - 邦楽の祭典「フォーラム青雲の笛」

丹南地域

- 武生市
 - ★ 閉会式・オープニングフェスティバル
 - ★ 全国吟詠剣詩舞道祭 ● 産業文化フェスティバル
 - 合唱の祭典 ● 演劇祭(現代劇)
 - 源氏物語フェスティバル ● 文芸祭「鎌倉」
- 鯖江市
 - オペラ ● 日本舞踊の祭典
 - ファッションフェスティバル
- 今立町
 - 和紙文化フェスティバル
- 池田町
 - 能面の祭典
- 南越前町
 - 民謡・民舞の祭典(はねそ)
 - 越前・若狭食の祭典(そば街道 今庄から)
 - 幕のフェスティバル(水袖)
- 越前町
 - シンポジウム(山と地域文化を考える)
 - 室内楽の祭典(マリンバ)
 - 茶道フェスティバル
 - 豊のフェスティバル(水袖)
 - 民俗芸能の祭典 太鼓の学校
- 越前村
 - 豊のフェスティバル(水袖)
- 清水町
 - 文芸祭「現代詩」

嶺南地域

- 敦賀市
 - ★ 民俗芸能の祭典(国際民俗芸能祭)
 - 邦楽の祭典 ● 能楽の祭典
 - 文芸祭「俳句」 ● 文芸祭「合同大会」
 - 豊のフェスティバル
- 小浜市
 - 茶道フェスティバル
 - 越前・若狭食の祭典
- 美浜町
 - 文芸祭「短歌」
- 若狭町
 - 縄文文化フェスティバル in 若狭みかた
 - 越前・若狭食の祭典(鯖街道)
- 名田庄町
 - 民俗芸能の祭典 和太鼓フェスティバル
- 高浜町
 - 若狭高浜童謡の祭典
- 大飯町
 - 演劇祭(現代劇) in おおい

★：県主催事業



福のくじから ふくらむ文化 羽ばたく未来

国民文化祭・ふくい2005

会期/平成17年10月22日(土)~11月3日(木)

オーケストラの祭典を目指し、練習を重ねるフェスティバルオーケストラ



「糸」を歌ってアピール



森 佳子さん
(福井市)

「灯台もと暗し」で地元にいると、地元の良さが分からないことが多いものです。外から福井を見てみると、福井が輝き出す地域資源がベースになって、日本、世界に通用する素晴らしい人材を輩出していることが分かります。ふくいの歴史・産業・文化の魅力が伝えるとともに、大会のコンセプト「絆」に因み、人と人との交流、次世代につなぐために、国文学を盛り上げたたいものです。私もコーラス仲間と中島みゆきさんのテーマ曲「糸」を心を込めて歌いながらアピールしていきたいと思えます。

「親切福井」で交流



門田 吉雄さん
(鯖江市)

福井県の恵まれた環境に感謝しながら、現状をよく理解し、福井の素晴らしい地域資源を新しい時代の布石づくりに生かしていくことが大切です。昨年のプレ大会で「ふるさと」再発見の観点から発表された「新・ふくい和歌集」の作品に感銘しています。今年は、さらなる「ふるさと」づくりに、多くの人連との意見交換の場をもつよう努めます。そして、ボランティア精神で、心のふれ合い交流を重ねて福井県の魅力を伝え、「親切福井」のイメージづくりに努めていきたいと思います。

みんなの力で盛り上げよう



近藤 路子さん
(小浜市)

私は、いくつかの地元のイベントに参加して感じていることは、人と人との心の結びつきが、その会を盛り上げているということです。この「新・ふくい和歌集」には、その地方の特産やメッセージが込められています。この郷土を見つめ直し、これをうけついでいくことが大切です。今回の大使役は一生に一度の大役です。色々のことを学ぼうという姿勢で取り組んでいきたいと思えます。県民のみならず、それぞれの分野で参加していただき、「国民文化ふくい2005」を盛り上げていきたいと思います。

第6回 げんでん ふるさと文化賞・芸術新人賞

中島(郷文)・渡辺(植研)・吉川(書道) 3氏を顕彰

新人賞に築山(文)・平岡(マンガ)さん

財団では、2月7日(ふるさとの日)、第6回(平成16年度)げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞の表彰式を原電敦賀地区本部会議室(敦賀市本町2丁目)で行いました。前川財団理事長から受賞者一人ひとりに賞状、賞金、顕彰盾を贈り、栄誉をたたえました。受賞5人の方々の横顔や抱負を特集しました。

中島氏 受賞を機に歴史民俗更に研鑽

中島さんは、昭和19年、県立小浜中学から陸軍予科士官学校(陸士61期生)に入學、翌年終戦を迎えて、小浜に帰郷。敗戦時の空虚な中から脱して、青年団活動やふるさとづくりに活躍されました。平成7年から9年間、県立若狭歴史民俗資料館長として、歴史・民俗の研究や文化財の保護を中心に、若



書斎で史料を調べる中島さん

狭路の特色ある文化をアピールすることに努めてこられました。

中島さんに、今日までの人生で最も大切にされてきたことをお聞きすると「歴史に学び、アカウナタビリティ(結果責任)とは何かを考えたこと」さらに「平成9年に発刊した『福井県の誕生』を世に問うたこと」をあげられました。中島さんは、県段階の各種団体の要職を務められたこともあり、福井県における若狭と福井との地域格差を活性化の面でどう縮めるかが持論でした。「福井県誕生のルーツ」の執筆は、中島さんにとって、郷土愛の探究でもありました。今回の受賞を、

「過去を問うのでなく、今後の歴史民俗の研鑽につなげるもの」と自らを励ましていました。

渡辺氏 福井の植物実態 自分の目で確認

福井市足羽山にある市立自然史博物館に渡辺さんを訪ねました。研究室で植物標本を整理中でしたが、しばらく時間を頂き、植物の研究活動などについて貴重な話を聞くことができました。

渡辺さんは、旧朝日町岩開の出身で、子供の頃から、よく山野を駆けめぐり、さのこや草花を採取することが好きで、今思えば、この界に入ったきっかけかと、思い出を語っていました。特に、今日まで歩んできた研究活動の中で、最も大切にされてきたことをお尋ねすると「植物の確認はバーチャル情報によるのでなく、すべて実物実態を自分の目で確認すること―これが私の信条です」と。教員時代から県内の山野をくまなく歩かれ、福井県の植物分



植物標本の整理に励む渡辺さん

類地理の基礎データを確立された渡辺さんの信念に敬服しました。また、福井県の文化・芸術の取り組みについてお聞きすると、「一時的な付け加え的アピールでなく、全ての面で、辛抱強く、自信をもって継続することが大切です」と貴重な所見を伺いました。



フランス・パリ、エッフェル塔下で吉川書一SHOINGに大発表

吉川氏 感動こそ人生の元気の素です

福井市大手3丁目、放送会館内の吉川書一教室で、吉川さんにお会いしました。初めに、今回の受賞の感想をお聞きすると「思いがけないことで、大変嬉しいですよ」と語り、「芸術・文化は経済と同様に、若者を認めて活動力を大切にする風潮をつくらなければなりませんね」とSHOアーチストの熱い提言とつけとめました。

吉川さんは、幼稚園の頃から書道を習い、小・中学生の頃には、数々の賞に輝くなど「書」の基本をマスターしたそうです。高校を卒業後、書に取り組み一方、タイヤ屋や鉄工業など色々な仕事を体験。苦勞の連続でしたが、これらの苦も、今思えば、自分の身となり、糧となっていると過去を振り返りかえっておられました。



げんでんふるさと文化賞・芸術新人賞表彰式

プロフィール

げんでんふるさと文化賞

若い頃より小浜市・奥連合青年団長を勤め活躍。長年、地元の内海郵便局長を勤めたつら、小浜市教育委員長、県教育委員会長を歴任し、教育・文化振興に指導的役割を果たす。平成7年から8年間県立若狭歴史民俗資料館長を勤め、若狭の寺院などの特別展を毎年開催するなど若狭路の歴史・民俗の研究、文化財保護行政に顕著な業績を残された。同9年「福井県の誕生」を出版されるなどふるさと文化の啓蒙と振興に大きく貢献されました。



中島 辰男氏
(76)
小浜市甲ヶ崎



渡辺 定路氏
(71)
福井市松本4丁目

1955年福井大学卒業後、武生一中、羽水、武生、高志高校勤務。数報のかたわら福井県の植物分布の研究に生涯をかけ、89年に「福井県植物誌」を、03年には同書改訂版を出版。その他「北陸の樹木」「福井の生物」などを発刊。本県の植物学の権威的役割を果たされ、県内の植物分類地理の基礎データを確立されました。86年には福井市立自然史博物館長に就任、今日的課題である自然・環境教育や啓発活動に尽力、多くの功績をあげられました。



古川 詩一氏
(62)
福井市学園2丁目

書を専ら読書先生らに師事。1964年「金星賞」、毎日書道展グラフィック、福井市民文化賞など受賞。64年「第一温泉賞」を手始めに、中国・北京書法展「SHO古川詩一パリ展」などスケールの大きい行動力と企画力で、国内外で個展とパフォーマンスを展開。NHK大河ドラマ「武蔵」のタイトル、昨年9月には「SHOワールド展パリ」を開催するなどSHO・アーティストとして多様な表現活動の中で、ふるさと福井のアピールと活性化に尽くされた功績は大きい。

プロフィール

げんでん芸術新人賞

京都府出身、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。日本近世史の研究論文を発表しながら時代小説を執筆。福井県在住の若手女流作家として全国レベルで活躍している。著書として「波草の宿風」「葉書売り」「北前船始末」「鶏池小町事件帳」。近作では、江戸時代の小浜論の史実を題材にした「蔵屋敷の道い」を出版。また福井新聞コラム「新聞を讀んで」を連載、鋭い紙面批評に好評を得るなど将来的な新進作家として大いに期待されています。



築山 桂さん
(35)
福井市桃園1丁目



平岡 愛子さん
(30)
鯖江市戸口町

鯖江市出身。洗足学園大学音楽部器楽科卒。打楽器専攻で優秀賞。第5回ベストプレイヤーズコンテストで奨励賞。第6回「長江杯」奨励コンクール管打楽器一般部門で優秀賞を受賞。県立音楽堂でソロリサイタル開催(2回)。平成16年2月「ふるさとの日記念コンサート」アンサンブル金沢と共演。絶賛を浴びる。同年10月、国民文化祭プレ総合フェスに出演するなど県内で抜群のマリンバプレイヤーとして、また指導者として、今後の活躍が大いに期待されます。

築山さん

いつか、福井の物語を書きたい

築山桂さんは、子供の頃から絵本を作ったり、高校時代には自分の好きな物語をノートに書いていたりしたという。作家生活についてお尋ねすると、「10代の頃から作家になりたくて、その夢をかなえることが人生の目標でした。そして、その夢を信じていることが何よりも大切なこと」と言い切りました。昨年出版された「蔵屋敷の道い」は、嘉永年間、大阪を舞台に、小浜藩の侍や若狭出身の呉服商な



築山さん、笙をかかえ
日下修行中

どが登場する時代小説で、この小説は、大阪での歴史史料を参考にしていますが、すでに福井へ来て10年になりますので、今後は越前、若狭の歴史を採訪し、地元の史料集めもしていきたいと語ってくれました。桂さんは、古代から伝えられている雅楽に興味が高く、4年程前から「笙」を吹く練習を始めたという。今後の作家活動の抱負をお聞きすると、「楽しい小説をモットーに、いつか、福井

平岡さん

心に届く楽しいマリンバ演奏目指す



心の音楽をモットーに
マリンバ演奏の平岡さん

を舞台にした、福井でしか語れない物語を作りたい」と頼もしい答えをいただきました。鯖江市戸口町の平岡さんの自宅を訪ねると、マリンバが置かれた応接間に案内

されました。平岡さんは、中学、高校時代は吹奏楽部で活躍、大学に入って、本格的にマリンバに取り組みました。卒業後は、旧朝日町のマリンバ製造会社に就職、福井県を代表する楽器の誇りと、マリンバの素晴らしさに、ほれこみました。マリンバプレイヤーとして最も大切にしていることを尋ねると「聴いていただけの方々に楽しんで頂けることを第一に考え、楽器を通して、自分を表現すること。また、演奏活動で、楽器を通して多くの人に出会えること」が私の喜びです。」と若い音楽家としての希望と期待がこめられていました。平岡さんは、自宅で週2回、旧朝日町で1回のマリンバ教室を開校し、後進の指導にも力を入れています。この受賞を契機に今後の抱負をお聞きすると、「心に届く音楽をモットーに、マリンバを身近かに、楽しんでもらえるよう、また、新しい音楽のあり方にも挑戦したい」と。

由利公正

— 特異な実践哲学 —

文／三上一夫

(上)

「ふるさと福井・人物シリーズ」第2弾として、福井県の産んだ異才、日本で最初の大蔵大臣「由利公正」を取り上げました。

幕末維新期の福井藩を中心とした政治社会情勢など幅広く研究しておられる歴史研究者三上一夫さんに「由利公正―特異な実践哲学―」と題して、本誌(「上」・「中」・「下」)に分けて執筆をお願いしました。(財団編集係)

「馬威し」にみる

気力・体力

福井城下は、武士・町民・農民らの人出で大変なにぎわいである。弘化四年(一八四七)一月十四日、福井藩名物の「馬威し」がはじまろうとしている。

この行事は、青年藩士が俥馬で疾走する際に、群衆が太鼓や爆竹などを打ち鳴らし、または大声で馬の進路をさまたげるなかを、落馬せずに巧みに突破できたものが勝者となる。

もともと一朝有事のとき軍馬が兵火騒

乱のなかを恐れずに走らせようとする軍事訓練的なものであったのが、いつしか藩庁主催の馬術競技ふうのものとなり、毎年正月に催されたのである。

そのリアルな情景は、粟川師福筆の「馬威しの図」(福井市立郷土歴史博物館蔵)によりうかがい知ることができ、この土・農・工・商の一体化した尚武的な価値は、全国にも響いていた。

コースは城内の板御門から出発し、本町・興福町を突っ走って、柳御門から城内の西馬場に戻るものであった。

いよいよ打ち出した太鼓を台図に出発。たちまち通りいっばいに塵声が起こり、

群衆は馬の行く手をさえぎる。そのためあともどりするもの、落馬するものなど、まさに興奮のルツボと化するありさま。

そのとき、藩主松平慶永(春嶽)や重臣らが観戦するなかを、俥馬をあやつり、あたりをけ散らしてまっ



PROFILE

三上 一夫氏

1921年朝鮮京城府生まれ。京城帝国大学史学科卒業。福井県立大野高等学校長・福井県教育研究所長などを経て、現在福井工業大学名誉教授。1989年に福井県文化賞、2004年に福井新聞文化賞を受賞。主要著書に「公武合体論の研究―越前藩幕末維新史分析」、『横井小楠の新政治社会像』。最近では『幕末維新と松平春嶽』など多数。

「毛矢侍」の家に生まる

石五郎は文政十二年(一八二九)十一月十一日、福井城下足羽川のほとりの毛矢町で、百石取り御近習番三岡義和(よしとも)の長男に生まれた。禄高百石といっても、極度に困窮した藩財政から、藩士の俸禄は軒なみに減らされ、実質手取りは三三石余の年収。

父は日々豊城し、その往復には当時足羽川に橋がかかっていたため、「繰り舟」といって、対岸に張られた綱を手繰りながら渡ったのである。そこでこの町一帯の藩士層は、町民からも「毛矢侍」とみまげられていた。

三岡家の家計はすこぶる苦しく、母の幾久(大越猪左衛門の女)は、家人の衣服一切を手織でつくり、野菜・乾物もなるべく自家の菜園のものを用い、魚類の購入は月に二度ばかりというありさまで、



由利公正旧居跡(福井市毛矢1丁目)現在中機工事のため福井市文化財保護センターに保管

いかに家計のやりくりが苦労したかがわかる。

かれが七歳のとき、父親が江戸詰を命ぜられたので、母親の実家に預けられた。伯父は祐筆で手習いの師匠でもあり、また近所の手習子を友だちとしながら、机上の学問にはあまり興味や関心を寄せなかったようである。

武家の子弟が必ず修めねばならない儒学の経典である四書五経の素読にしても、十七・八歳ごろまでかかったほどの珍しい読学ぶりであった。

かれはその頃の回想談として、次のようなことを述べている。父から「武士は藩より俸禄をもらって



「馬威しの図」粟川師福筆

いるが、お前ほどのように藩のために尽くすつもりか」と問われながら、その返答に窮するばかりであった。ある日のこと、庭の草取りをしていてふと考えた。河原にいる手品芝居は、子どもでもおとなでも皆一人前の芸をして世を送るのだ。百姓は労働によって生計を立てている。ところが武士は養われる分際で、いくら文武にとめても生涯ものの役に立たず、労力の点を比べれば百姓の日雇いなどにはとうてい及ばないではないか。武士として一番大切なのは、物事に処する心掛けがどうかということだ。その心掛け次第で国の用にも立つものだと気づいて気丈夫になった(三國丈夫「由利公正伝」)。

このようにかれは、書物からの学識よりは、実際の生活体験を通してこそ、現実の社会に対するしつかりした心構えがでせるものと考えたのである。三國の生活体験を最も重視する思考態度は、生涯を通じて変わらないことになる。

四苦八苦の藩財政

そこで三國が打ち出す開明的な論議を考へる場合、まず最初に藩の深刻な財政事業について触れる必要がある。

実は十九世紀前半の天保期を迎えた自分の藩の財政は、まったく破局的な様相をみせていた。その間のいつわらない実情は、天保七年(一八三六)藩から幕府に差し出した嘆願書のなかの借財総額が九十万両にのぼるといふ訴えによっても明らかである。これは藩庫の年間収入のざつと二十年分ぐらいに相当する莫大な借財を背負い込んだ格好である。

いうまでもなく、幕藩体制のもとで、年がたつことにますます財政悪化の途を

たどったのは、福井藩にかぎらず全国の諸藩にも、程度の差こそあれ共通したところである。もちろん同藩では、家臣の禄米の大幅減俸ともいえる「借米」、厳しい検約令、領民への御用金の賦課や領内外の両替商や大商人からの借金政策を強引に進めた。

またいっぽう、農民の自生的な商品生産に目を付けて、藩が強制的にそれらの諸物産を特権商人に買い付けさせ、その代わりに商人から藩上へ買加などの税を



松平春嶽肖像

(福井市郷土歴史博物館所蔵)

取りあげて、赤字財政の穴埋めをしようとした。これを藩専売制と呼ぶが、同藩ではすでに十八世紀以来、布帛・紙・鎌などの専売を行ない、財政収入の増加をはかったが、このような農民生産者の利潤を根こそぎに収奪する仕法では、かえって商品生産の自主的な発展を抑えて、生産者を行きづまらせるといふ皮肉な結果を招いた。

そのため藩財政の再建強化どころか、ますます窮乏していき、しかもその開天保期をピークとする大々的な百姓一揆にも悩まされるなど、甚だ嘆かわしい苦境に陥ったのである。

このような時期に天保九年(一八三八)十月、御三郡の田安家から第十六代藩主となった春嶽は、思い切った藩政改革に取り組んだ。まず人材登用につとめ、家老クラスでも壮年どころの新進気鋭の願

ぶれに一新した。そして家臣団の禄米を削減したり、厳しい検約令を出すなどしたが、ただちに財政難を克服する抜本的な施策とはなりえなかった。三國が藩の財政難打開に乗り出すに至った当時の実情は、ざつと以上のようなものであった。

斬新な

「民富論」的富国策

そこで三國は、藩の勘定奉行所で歳出入状況など具体的な財政内容を問いただしても、さっぱり要領を得ないため、嘉永元年(一八四八)の十九歳のときから五年がかりで領内各村を巡回し、米の実際の収穫高や諸物産の産出状況など詳しく調べあげた。

その結果、藩財政のうえでは近年は毎年約二万両という多額の支出超過となり、金銀正貨がどしどし領外に流出する事情が明らかになった。この際三國の考え方は、従来は、従来の消極的な緊縮政策では、財政がますます悪化し行きづまる一方だと判断する。

そこで積極的な財政収入をふやすための斬新な植策興業策を打ち出すことになる。まずかれは、肝心の物産が興らないのは、生産資金が枯渇しているからであり、このような資金を生産者にどのように調達するかがもっとも重要な課題だと考えた。しかし極度に苦しい藩財政の実情からみて、その資金の捻出ははなはだ容易ではないが、藩権力の信用に基づいて藩札を発行して生産者に貸し付け、産業資金の運用をはかるかというのである。

つまり藩札による生産資金の融通で、農民生産者の労働力をフルに活用して物産を振興し、それらの諸産物を通商貿易のルートに乗せることにより、領外や海外から大量の金銀正貨が獲得できるとい

う算段である。その理論的根拠を三國は次のとおり説くのである。

「例えば一人の女が五〇文の綿を買って糸をひけば、凡そ六五文になる。無用の藪も綿になれば一〇文の値があるというように、すべて領民の随意にまかせ、二〇万人で一日一〇文ずつ稼げば、一日二、〇〇〇貫文すなわち三三〇両の富をなす。三〇日で九、九〇〇両、一か月でほとんど一万両の富が得られる。それゆえ五万両の国債を起こしても、決して憂うるに足らない」(由利公正「子爵由利公正伝」)。



由利公正像

(福井市・中央公園)

要するに三國の仕法は、生産資金の融通により、領内に多数分散する小農民の余剰労働力や零細な手工業者のエネルギーを、できるだけ発揮させることに力点を置いて、領内諸物産の商品化をはかったことで、まさしく三國が主張する「民富めば国富むの理である」という「民富論」的な論理によることがわかる。

この点さき述べてたとおり、江戸中期以降、幕府はじめ全国の諸藩が実施した専売制が、農村における商品生産の発展を封鎖権力がしっかりと掌握して、生産物を安価で強制的に買い占め、農民生産者の利潤を徹底的に収奪する仕法とは、基本的に異なるわけである。

ふるさと大賞 写真コンテスト

第7回「ふるさと大賞」写真コンテスト（テーマ：今に息づく「ふるさとの素顔」）には、1,533人の方々から533点の作品、応募がありました。1月12日、審査会を開き、慎重な審査の結果、大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞5点、入選28点、佳作28点が選ばれました。

財団では、入賞作品（優秀賞以上）の表彰式を2月7日（ふるさとの日）、原産教育地区本部で行いました。

大賞



熊谷 和子さん（福井市）

「楽しいなわー紙芝居屋さん」



今に生きる子供達の笑顔が紙芝居屋の話術で、現代的に生き生きと描かれ、最高の瞬間で捉えられています。また、紙芝居屋の道具立も吟味されていて、その奇妙な格好が現在の違和感になり、子供達の笑顔が一層倍加されています。写真に必要な画面構成も整っています。人物のシャッターチャンス、道具等の配置関係も的確に生かされて、最高の写真に仕上がりました。「ふるさと大賞」にふさわしい作品です。 講評／八木 隆

女性の部

ふるさと賞

一般の部



例年11月の末頃になると、三方湖では、5メートルもある竹ざおを使って、水面をたたき、その音で魚を驚かせて網に追いこむ全国でもめずらしい漁法「たたき網漁」が始まります。叩いたときにあがる水しぶきを捉え、見事にシャッターチャンスをもにしました。また、船にいる二人のかけ合いが聞えてくるような詩的な作品になりました。 講評／水谷内 健次

「風物詩」青山 睦子さん（鯖江市）

自然の美しさが春の空気を通して伝わってきます。穂位置で手前の桜を生かし、山桜の穂を上手に引き立たせています。桜の花のピンク色を抜くのは大変難しいのですが、露出を調整し、成功しています。春爛漫、ふるさとの美しさを捉えた秀作です。 講評／三好 昭口



「神子の桜模様」三上 彰氏（福井市）

入選		一般	
学生 夕陽 本日ほ朝大なり	女性 「サーヤ、サーヤ」 風比有情	女性 神と紙の舞 菜の花に誘われて 「サーヤ、サーヤ」	女性 魔法のじゆたん 四人の里娘 野良仕事 気合いた!! 伝説を愛するふたり わかめ漁 帰郷後と わかれ漁 気合いた!!
藤崎 水野 日原	小林 高橋 安藤	山川 高山 安藤	多田 坪井 奥山 竹内 梅津 増永 高橋 酒井 原生林 原山
藤崎 水野 日原	小林 高橋 安藤	山川 高山 安藤	多田 坪井 奥山 竹内 梅津 増永 高橋 酒井 原生林 原山

優秀賞		ふるさと大賞	
女性 一般	女性 一般	女性 一般	女性 一般
学生 晴れた日に	女性 夜空のキャンパス	女性 風物詩	女性 神子の桜模様
東野 佳奈	賢田 則子	寺尾美代子	松村 透
		田中 秀幸	青山 睦子

審査委員				委員長	審査会委員（敬称略）
前川 則夫	三好 勝己	水谷内健次	野田 訓生	八木 隆	
当財団理事長	フジカワ一太郎（株） 福井事業部営業部長	写真家	福井県立美術高等学校 美術科教諭	写真家	

女性の部

優秀賞

一般の部



「古より福井の海は、この土地の人々に豊かな恵みを与え続けてきました。豊漁を得て港に戻る船上に起こる喜びと安堵の表情は大昔より変わらぬものなのでしょう。大漁を祝うように舞うカモメの群れは、水平線が画面を上下に分割してしまう効果を弱め、リズムカルな動きを添えています。船上の人達の動作とコスチュームに色彩もバランスよく配置され、水平方向に流れてしまう視線を遠慮に留めさせています。講評／野田 訓生

「帰港」寺尾 美代子さん（福井市）



「真先や軒先で、竿に掛けられて天日干しされる干し柿。それを手前に入れた大胆な構図が効果的です。きれいに皮むきされた柿は暖かい日差しに当たり気持ちよさそう。雲ひとつない青空とのコントラストも効いています。背景には、冬に備えた大根なども見えています。初冬の、のどかな一日が感じられます。講評／藤山 卓司

「冬じたく」田中 秀幸氏（福井市）



「夜空に大輪の花が咲いたようなすばらしい花火です。赤、青、黄色、紫と花火の色が鮮やかに表現されています。花火はどうしてもオーバー気味になりがちですが、抑えた露出でしっかりと撮影しています。海面に映る光の反射や色づいて分かれた花火をバランスよく構成していて画面に無駄がありません。夜空のキャンパスにすばらしい絵を描いています。講評／藤山 卓司

「夜空のキャンパス」鷺田 則子さん（旧宮崎村）



「黄白色に染まった表沼から日傘をさした女性が勝山城を眺めている風景をととも清々しく表現しています。空の青さと表沼の黄白色と城壁の白さが画面上に上手に配置され、勝山城の雄々しさを強調しています。谷に散らかった観光客がタイムスリップし、大昔に迷いこんで、驚いているような不思議さも感じられる作品です。講評／三好 節己

「表沼に立つ」松村 透氏（勝山市）

「晴れた日に」 東野佳奈さん（鯖江市）



「古くから福井を代表する産業として、今も受け継がれている和紙づくりは、今回のテーマにぴったりです。晴天の強い日差しの中で天日干しされる和紙の大きな白い面は、作者の造形心をつくってくれたことでしょうか。ともすれば平面的な構成になりがちな構図を、大胆に立体的な構図に仕上げました。奥に白黒のコントラストとともに、その立体感や進行感も利用して、一枚の建築写真のような力強い作品が生まれてきています。講評／野田 訓生

学生の部

学生		女性		一般																		
洗う	ふるさと	門出の日	秋冷に映く	大ふるまい	田植えの頃	リズムに乗って	カスミに集めて	ハイチーズ	黄金の海	光芝	（ふるさとこの境内）	待機	凍みる朝	新緑の頃	紀りの日	菜の花を揺る	希望に満ちて	あさげの頃	夏のはじまり	時雨	人生模様	刈込池秋映
上良	龍川	渡辺	坂井	海崎	沢崎	佐々木	河村	石岡	嶋田	清水	原	川	池田	吉川	久野	相木	森岡	加藤	山田	菅田	松山	池田
紗代	裕子	陽子	佳代子	栄美子	優子	優子	真	真	真	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年	正年
武生市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市	福井市

テ
今
の
こ
れ
が
は
た
し
た
と
の
よ
う
な
こ
と
が
あ
る
と
し
て
い
ま
す



各部会代表が勢揃いして開会式典＝難江文化センター

今秋、本県で開催される第25回近畿高等学校総合文化祭（近総）に向けて、機運を盛り上げようと、1年前イベントとして「プレ総合開会式」（当財団協賛）が去る11月3日、難江市文化センターで開かれました。

この開会式は、第15回県高等学校総合文化祭の総合開会式を兼ね、高校生や保護者ら約千人が参加しました。

オープニングは、県内12高校の合唱部で編成された総勢百人の県合同合唱団により「Agnus Dei」を歌い上げ、幕開け。

第1部の式典では、開会式部会の生徒実行委員5人による開会宣言が行われ、藤島・高志・丹生・武生の4高校で構成された県合同オーケストラが「威風堂々」第4番の祝典曲を演奏。続いて、大会のテーマソング「未来」の調べに乗って、「合唱」を先頭に「器楽管弦楽」など16の部門の代表生徒がフラカードを掲げて、舞台に入場しました。



武生東高校吹奏楽部のパフォーマンス



和太鼓合同チーム迫力あるばちさばきを披露



吟詠剣詩舞合同チームの舞台発表

第2部の福井県発表では、藤島高校演劇部が、壁にぶちあたったオルガン奏者が自分探しの旅に出る演劇（音楽堂風琴物語）を担当、劇の合間に、各部門の発表

郷土芸能部門では、勝山、福井農林高、嶺北養護学校高等部の計50人が和太鼓チームを編成し、曲目「ようこそ」を迫力満ちたばちさばきで会場を魅了しました。

テーマ 文化の帆を広げ 今こそ出そう

無限に広がる 大海原へ

国歌斉唱の後、生徒実行委員長、大馬進志野さん（武生商2年）が「私たち高校生1人ひとりが力を合わせ、第25回近畿高校総文祭福井大会を感動の渦で包まれるよう、頑張らしましょう」とあいさつしました。

「石筍」を台奏。創作ダンスでは、仁愛女子高ダンス部（63名）が「秘めたる情熱」を舞台一杯に演技を展開したほか、藤島、高志、武生、丹南高校の県合同アンサンブルが「Diverimento KV.138」第一楽章を演奏。



音楽堂風琴物語を演ずる藤島高校演劇部



仁愛女子高ダンス部の華やかな演技

表が盛り込まれる趣向で、展開され、最初に、竹沢伊代さん（高志高）による「トッカータとフーガ ニ短調」のオルガン演奏で、物語りがはじまりました。部誌発表では、琴の演奏を羽水高・日本邦楽部が

また、吟詠剣詩舞では、4校による合同チームが「一筆啓上賞作品集「私へ」より」の演舞を披露するなど、各部門とも若者のエネルギー溢る発表に会場から盛んな拍手が送られていました。

最後に、総勢73名の武生東高校吹奏楽部が「The Stone」を大演奏。

終幕は、出演者全員が舞台に集まり、「The Stone」を、手を振り、躍動の中に大合唱、会場一体となって感動のフィナーレを飾り、本番への成功の決意を新たにしていきました。



本番への決意を新たに会場一体となつてのフィナーレ

近総は、文化部のインターハイ、といわれる全国高校総合文化祭の近畿版。96年以來3回目の開催となる福井大会は、本年11月12日から20日まで9日間、近畿9府県の高校生らが集まり、県立音楽堂での総合開会式を皮切りに、県内10会場で開催されます。部門別では、音楽、演劇、美術工芸、将棋、かるたなど16部門に分かれ、競技や発表、生徒間交流などの高校生の文化系部活動の大イベントとして繰り広げられます。

シリーズ12 福井の文学碑

藤野厳九郎と魯迅 (中国の文豪)

足羽山公園に 惜別の碑

福井市

医師・藤野厳九郎先生と中国の文豪・魯迅の師弟愛をたたえる「惜別の碑」が福井市足羽山公園の一角（仏舎利塔50余メートル手前の遊歩道東側）に建てられています。

東に向けて建てられた碑の表面右側に「惜別」の文字が刻まれています。これは、藤野先生が仙台医学校教授時代に中国（当時・清国）からの留学生周樹人（後の魯迅）に贈った先生の写真背面の文字を拡大したもの、また、中央部には彫刻家岡田光平さんの手による藤野先生のレリーフ肖像がはめこまれています。台面の「藤野厳九郎碑」は魯迅の未入

許広平文士の揮毫で刻されています。この碑は、40年前、昭和39年4月12日に建立除幕されたもので、背面の碑文は、はっきりと読みとれませんが、



仙台医学専門学校当時の藤野厳九郎先生

作家青司山治さんが、両先生の出会いと2人の結ばれた師弟愛をたたえた記念誌文が刻まれています。芦原社会福祉センター（あわら市丹津）の藤野厳九郎資料室には、その誌文の原稿が展示されていました。

「明治37年 周樹人仙台上に学ぶ 教授藤野厳九郎懇切に指導すること2年、周樹人志をかえて仙台を去る。先生深く周氏を惜しみ惜別の2字を著して小照を贈る。

周氏は後の中国文豪魯迅先生なり。魯迅その小照を終生壁間に掲げて、己を奮勵し、小品「藤野先生」を草して、旧師を偲んで曰く「先生は世に無名の人、己れには極めて偉大の人」と。大正5年、藤野先生故郷福井に帰れ、医を営んで農夫の友となり、昭和20年8月11日、72年の生涯を終る。

有志相謀り、上海市魯迅記念館所蔵の藤野小照背面の文字を探り、仙台医学専門学校教授時代の先生小照と共に

刻して、茲に惜別の碑を建て、両先生不滅の結縁を記念す。因に台面藤野厳九郎の碑の6文字は魯迅夫人許広平文士に囑して、これを誌す。」

藤野厳九郎は、明治7年（1874）坂井郡本荘村下番（現在・あわら市）で、医師藤野升八郎の3男に生まれました。龍翔小学校、福井中学校、愛知医学校を卒業したあと、仙台医学専門学校の教授となり、解剖学などを教えていました。明治37年（1904）、周樹人という中国の留学生が入学してきました。この青年が藤野先生の講義をノートして、先生に提出したことから深い師弟関係が始まりました。異国の地で学ぶ周樹人に、朱筆で漢字や説字をなおしながら、隣国の学生を親切に育てていったのです。やがて彼は、志をかえ、仙台医専を去ることを決意しました。藤野先生は、別れに際して、写真を与え、その裏面に、「惜別藤野 謹呈 周君」の8文字をサインして彼に贈りました。周樹人はのち魯迅というペンネームで中国の代表的作家に成長しましたが、いつまでも藤野先生のことを忘れず、彼の書斎の壁には、死ぬまで、先生の写真が飾られていました。また、1934年頃、「魯迅遺集」の日本語訳が出版され、その中に、藤野先生

という作品が入っていました。両人の再会の機会に恵まれることはありませんでした。

仙台医専が東北大学医学部に昇格するとき、教授をやめて、郷里へ帰った藤野先生は、後半生を開業医として暮らした。昭和20年（1945）8月11日、72歳で亡くなりました。魯迅は、それより早く1936年、この世を去っていました。



芦原社会福祉センター内の藤野厳九郎資料室＝あわら市丹津

藤野先生の志を継ぎ 日・中友好の絆

あわら市

昭和58年（1983）、藤野先生の出身地旧芦原町と魯迅の出身地紹興市は、2人の師弟愛を縁に、友好都市が締結されました。以来日中友好親善を図る、中学生らによる相互の使節団派遣が現在も続けられています。

この友好都市を記念して、藤野家遺族から、先生が12年間、三田町宿で暮らしていた旧居を旧芦原町に寄贈され、同町丹津に「藤野厳九郎記念館」として移築。また、別棟（芦原社会福祉センター）に記念資料室を設け、藤野先生の遺品や魯迅にかかわる関係資料を展示し、両国友好の絆を深める拠点ともなっています。



藤野厳九郎と魯迅の師弟愛をたたえる「惜別の碑」。＝福井市・足羽山公園



藤野厳九郎記念館（旧居）＝あわら市丹津

敦賀市立博物館では郷土にゆかりのある作家や師弟関係などでつながる近世・近代絵画を系統的に収集しています。

- 絹本着色
- 縦 110.0 横 42.0cm
- 江戸中期
- 落款 八十翁原在中画
- 印章「原致遠印」白文方印
「子重」白文方印

解 説

激しい墨雨のなか大鱗鯉にまたがった琴高仙人が、逆巻く波頭から浮上する躍動感にあふれる図です。常に見る同図には道服を着た温顔の琴高仙人が、鯉に乗って浮行する姿を描いているのとは、まさに対照的な内容に描かれています。

その筆致は肥瘦に富むのびのびとした雄勢を横線によって横かれ、加えて画面構成にも格別の趣が認められます。すなわち、右手で笠を押さえ、眼光鋭く中天を見据える琴高の姿態と、頭上に双角、口髭を立てて前方をにらむ大鱗鯉が、尾びれで激しく水面を叩いて躍り出る情図は、波頭の飛沫描写の迫真性と相まって、在中の迫真的な写実追求の精神がうかがわれて興味を引きます。

「琴高は、中国隋代の仙人で宋唐王に仕える、常に琴をひく、常に乗水に入つて龍の子などをとる、ある日、弟子たち水辺に祭壇を設けて琴高を待つ、赤き鯉に乗つて出る、一ヶ月ほど留まった後、また乗水に入る。」（『後素集』「東洋西遊紀略」などから引用）——鯉に乗る琴高の画面は好題材としてよく採り上げられています。

原在中は、京都で出生。出生について諸説があり、若狭小浜藩主、酒井家にかかわる藩風説が有力で、父は性圓と稱し、生年は寛延3年（1750）と推定されています。画を狩野派の石田雨江に学び、一説に円山応挙に師事したともいわれるが、親交にともなう関係であったと思わ

れます。

また、中国・元明絵画を研鑽し、その片鱗をうかがわせる人物・花鳥画などの作品を遺していますが、さらには、わが国伝統の有職大和絵にも思いをはせて、細密華麗な作品を遺しております。

在中は原派の始祖で、京都御所、公家、神社仏閣、豪商など多方面にわたって横絵・屏風などの大作を揮毫して、その西系は原・三梅・大嶋・梅戸の諸家に分かれ、その門流の中には近世昭和に至っています。

天保8年（1837）88歳で亡くなりました。



琴高仙人図 一幅 原在中筆

シリーズ

ふくいの
伝統行事
春祭り・秋祭り
・「みやあげ」神事
敦賀市指定無形民俗文化財
敦賀市

敦賀市刀根に伝わる敦賀市指定無形民俗文化財・氣比神社の春祭り・秋祭りのうち「みやあげ」が、去る12月5日、同区公会堂や同神社で古式豊かに行われました。

同区では、今回から、高齢化、過疎化する地区の将来を見据え、伝統神事の原則を堅持しながら従来の東西各一軒の当屋による餅つきを改め、現在46軒の区民総出で、区公会堂で餅つきを行うなどの改革に踏み切った形で進められました。



餅つき場にわけて東・西座にわかれ男社な餅つき



宮上げ準備で神社に向かう
当屋のひとたち

があります。
神社には、慶長6年(1601)の棟札があり、「東座」「西座」の文字を見ることができるところから、この頃には既にこの役割が成立していたと思われま

古式を留める豊作の感謝祭

この神事は、同区の氏神・氣比神社(祭神・仲夏天皇)に、神田でとれたモチ米を献供する霜月祭とも、新嘗祭とも称される豊作の感謝祭です。この行事の起源は、今から1700余年前に、仲夏天皇が刀根へ行幸されたとき、村人が餅をついて献上したところ、大変お喜びになられたという故事に由来しているといわれています。

氣比神社には、専任の神職がいないため神守と呼ばれる役のほか、東、西二座の当屋が選ばれ、祭りの一切を司る伝統

前には、古式にのっとり同市の松原海岸で「みそぎ」の精進潔斎を行い、神事の準備が進められます。5日の早朝、4時半、集落に起こし太鼓が打ちならされ、区公会堂に区民が「つきつき」と集まります。前日の夜から蒸し蒸しが準備されたモチ米が蒸し上ると、東座、西座に分かれ、餅の着物に押掛け、鉢巻姿の男衆4人が、



氣比神社正面参道



古式の役割を担い、行列を組んで
神社に向かう一行

それぞれの座で、古くから伝わる餅つき歌を歌いながら棒杵で代るがわる餅をつき、ほほつきあがると、棒杵の先に餅を挟んで、天井に届かんばかりに高くと差しあげます。これは豊作を感謝する姿を

象徴である「正殿」、「太夫」、往時の生業を具現した「炭焼」を男の子が担当。「櫃の蓋」「神酒持ち」は女の子がうけもち、行列を組んで、神社に参進します。神社では、御供物を神殿に供え、祝詞の奏上、殿前に「宮上げ」の神事が執り行われます。



「牛の舌餅」や赤餅など神前に供える宮上げ



表現したものといわれています。餅は古式に備って、「牛の舌」という楕円形状の餅を48枚作ります。また、小豆を混ぜた「赤餅」も同じように勇壮な餅つきで作られます。
10時過ぎると当屋の人達が、四方作った「牛の舌」や「赤餅」などの御供物をもって神社に向います。続いて、神格の

平成17年度 財団事業計画・予算決まる

文化の育成支援を柱に6重点施策



平成17年度予算・事業計画を審議する理事会

平成17年度の財団事業計画と収支予算は、3月10日に開催した第22回評議員会と、第21回理事会で可決されました。17年度は、第20回国民文化祭が本県で開催されますので、その成功を目指し、ふくい文化の育成支援をはじめとする6重点施策を計画に展開することとし、これらの関連予算を編成しました。

6重点施策	予算総額 9180万円
1. 国民文化祭ならびに県内高等学校文化部活動の強化支援	17年度予算は、総額9180万円で、重点施策を重点に予算配分を行い、事業費総額7430万円を計上しました。
2. 文化団体等に対する助成事業の充実	財団寄付行為で規定している事業区分による事業費は次のとおり。
3. 魅力ある文化イベント提供事業の実施	1. 地域文化の振興事業 1710万円
4. 芸術・文化を愛する県民風土を醸成する顕彰事業	2. ふれあい・ゆとりの創造事業 1220万円
5. 人・環境・文化・地域に根ざしたふれあい活動の推進	3. 芸術鑑賞機会の提供・文化創造事業 3280万円
6. 親しまれる財団広報・広聴活動の充実	4. 優れた文化活動に対する顕彰事業 760万円
	5. その他の事業（HP、広報誌の発行など） 460万円

第5回

日英小学生絵画交流展

12/4-12/14~27

お国柄の絵 85点を展示
初日、ゼンジー・一億さんマジック披露

敦賀

財団では、16年度で連続5回目となる日英小学生絵画交流展を主催。BNFL社（英国核燃料会社）と共催で、12月4日から12日まで敦賀原子力館、同月14日から27日まで、げんでんふれあいギャラリー（敦賀市本町2丁目）で開催しました。作品展には、敦賀市の5小学校（敦賀北、南、西、威新、葉原小）から40点、イギリスの西カントリー地方、セラフィールド近

者をはじめ、市教委、学校長、BNFLジャパン関係者ら約百名が出席し、開幕のセレモニーを開きました。学校長ら関係者の挨拶のあと、イギリスの紹介や、イギリスからのビデオレターが上映され、両国の友好・交流の輪を深めました。

アトラクションでは、テレビなどで人気を集めているマジシャン・ゼンジー・一億さんを招きました。小学生たちを目の前にしたリング・マジックや観客にモデルになってもらうロープ・首かけなどをコミカルな話術で楽しむマジックを展開。最後に、色違いの顔の画像の瞬間移動手品を披露して爆笑と喝采の中にあし一刻を過ぎました。



絵を出展した児童・家族が参加して開かれた絵画交流展＝敦賀原子力館

郊の9小学校から45点が出展されました。日本側では、敦賀の夏祭り、学校の様子、船などを題材にした水彩画、英国の作品も風景画や狩猟など日々の暮らしをテーマにした作品が多く、訪れた人は、それぞれお国柄が出た楽しい絵に、人気が集まっています。



小学生を前にマジックを披露するゼンジー・一億さん

第69回県かきぞめ競書大会

財団・特別協賛



表彰式で財団賞を受ける受賞者
＝2月12日・福井新聞社風の森ホール

第69回県かきぞめ競書大会（福井新聞社主催、(社)若越書道会共催、当財団特別協賛）には、今年は小学生から大学生まで約7万点の応募作品が寄せられました。第1次審査を通過した3329人が、1月29日、県内13会場で、課題に挑戦し、かきぞめ席上争いが行われました。

書きあげられた作品は、翌30日、若越書道会会員らが審査に当り、最優秀の大賞に、垣本康平さん（小浜市・豊浜小6年）ら4人が選ばれたほか、推薦147点、準推薦、奨励賞の各賞作品が選ばれました。

財団では、小・中学生の推薦作品の中から11点についてげんでんふれあい福井財団賞を贈りました。

- 受賞のみなさん
- ▽大くぼ けんしろう（北日野小1）
 - ▽まきつ田 かずま（三國西小1）
 - ▽かま谷 けんぞう（栗野小2）
 - ▽上山 ゆきの（敦賀北小2）
 - ▽中村まさき（国富小3）
 - ▽盛木 瑞希（高浜和田小4）
 - ▽吉川寛明（麻生津小5）
 - ▽野田彩夏（口名田小6）
 - ▽松田彩花（栗野中1）
 - ▽斎藤菜（清水中2）
 - ▽加尾卓也（小浜中3）

第7回
ふるさと大賞
写真コンテスト
入賞作品展

2/1~13
18~

今に息づく「ふるさと」の素顔」に
関心

敦賀
福井

財団主催の第7回ふるさと大賞写真コンテストの入賞作品展が2月1日から13日まで、げんでんふれあいギャラリー（敦賀市本町2丁目）で、同月18日（土）まで、福井市花堂2丁目、ショッピングセンター「ベル」で開催された。会場には、応募作品533点の中から選ばれた、ふるさと大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞5点（関連

を題材に人の営みを加味した姿をおさめた場面も目立ち、ふるさとに受け継がれた多様な表現に関心を集めていました。コンテスト審査に当たられた八木隆さんは「ふるさと」というテーマが7回を数え、写真表現の波及に、最高の題材になっており、特に今回の審査では、女性の表現力が目覚ましく、新鮮で、大胆な作品が多く見受け

られた。ふるさと大賞1点、ふるさと賞2点、優秀賞5点（関連

を題材に人の営みを加味した姿をおさめた場面も目立ち、ふるさとに受け継がれた多様な表現に関心を集めていました。コンテスト審査に当たられた八木隆さんは「ふるさと」というテーマが7回を数え、写真表現の波及に、最高の題材になっており、特に今回の審査では、女性の表現力が目覚ましく、新鮮で、大胆な作品が多く見受け



入賞作品に見入るカメラファンら
=敦賀市・げんでんふれあいギャラリー



力作にじっくり鑑賞する人たち
=福井市・ショッピングセンター「ベル」

記事・P8・9）をはじめ入選、佳作各28点、計64点の作品を展示しました。

今回の作品公募のテーマは今に息づく「ふるさと」の素顔」としたこともあり、ふるさととの自然、風景、祭り、伝統イベント

られた」と絶賛されました。2会場とも、初日から多くのカメラファンらが鑑賞に訪れ、作品の独特の個性や表現に、じつくりと見入っていました。

られた」と絶賛されました。2会場とも、初日から多くのカメラファンらが鑑賞に訪れ、作品の独特の個性や表現に、じつくりと見入っていました。

「若狭路の祭り」と芸能」（三 耕 錦）
遺稿集Ⅰ

財団、若狭路文化研究会と共同発刊



王の舞いなど民俗調査の記録を
活字化した「若狭路の祭り」と芸能」

若狭路文化研究会が平成16年度の企画事業として取り組んできた「若狭路の祭り」と芸能（錦耕三遺稿集第一巻）が、当財団と共同発刊のかたちで、このほど刊行されました。

錦さんは、国学院大学卒業後、朝日新聞社に入社。同社福井通信局長時代に若

狭の民俗調査を行い、詳細な記録を残しました。特に、旧三方郡を中心とした若狭地方での春の祭礼に行われる「王の舞」の詳細な舞踊譜をはじめとする貴重な記録や調査研究に注いだ未発表の原稿を残したまま、昭和36年（1961）享年53歳で亡くなりました。これらの遺稿は、美浜町在住の民俗学者小林一男氏に保管されていましたが、その後「王の舞」の民俗学的研究」の著者である橋本裕之氏（千葉大学助教授）に託され、整理が進められてきました。

今回の出版は、橋本裕之氏の解説・監修のもとに製本されたものです。図書は、全2巻3冊となりますが、今回発刊は第1巻。第2巻は平成18年3月刊行の予定、別冊「舞踊譜」。

第1巻、A5判、函入、530頁

16年度県新人演奏会
オーディション

2/13
3/13

演奏家の登竜門・練習成果を競う

福井

県文化振興事業団主催の16年度県新人演奏会（当財団協賛）の公開オーディションが、2月13日、福井市の県立音楽堂（ハーモニーホールふくい）で開かれました。

この演奏会は、県内在住が、本県出身で音楽の道を歩む演奏家を発掘する目的で、毎年度開かれ、若手演奏家の登竜門となつてい

ます。今回は、県内外の音楽系大学や短大の学生、卒業生のほか、高校生2人を含む男女27人がピアノ、



練習の成果を発表する参加者

声楽、器楽の3部門に応募。それぞれの演奏や歌唱で、それぞれ持ち時間の6分ずつで、日頃の練習の成果を披露しました。

審査は、ピアノリストの神谷郁代さんら5人の審査員が当り、ピアノ部門で6人、器楽部門4人、声楽部門3人の計13人が合格しました。

3月13日、同音楽堂で、合格した新人演奏家による演奏会が開かれ、オーディションと同じ曲目を披露しました。

会場からは、若手演奏家に、将来を期待する大きな拍手が送られていました。

平成17年度財団助成事業を募集 申請期限4月30日(土)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて平成17年度の助成事業を受ける団体を募集しています。

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を4月30日(土)まで(申請事業の実施が4・5月の場合は3月31日まで)に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは財団にお問合せ下さい。

対象団体の要件

- 1、福井県内に活動の本拠を置く団体
- 2、構成員(会員)が原則として20名以上の団体
- 3、平成17年4月現在で、原則として設立2年を経過している団体
- 4、営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
- 5、特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

助成団体の選考・決定

助成団体の選考は、当財団の理事、評議員の中から委嘱された「選考委員会」に諮問し、その答申に基づき助成を決定します。助成が決定した場合は、速やかに申請団体と推薦団体に通知します。

愛読者アンケートご回答のまとめ

げんでん 福井 第20号

本誌第20号のアンケートに総数26通のご回答をいただき、ありがとうございました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり、本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願い申し上げます。



Q: 第20号で良かった記事は?

- 国民文化祭プレフェスティバル/総合フェス・開催 11名
- 創刊20号記念「財団の進路を拓く」座談会 3名
- ふるさと福井人物シリーズ 松木庄左衛門(下) 21名
- 福井の文学碑シリーズ11 女流俳人 哥川(三箇町) 12名
- 財団国際交流事業 英国中学生を招く 4名
- ふくいの伝統芸能「若狭能倉座の神事能」 9名
- フクイデザインコンペティション2004公開審査会 1名
- 人間国宝 茂山千作師を招き「狂言を楽しむ会」 5名
- 情報ファイル 2名
- その他 1名

本誌への主なご意見など

- 少し難しすぎると思うので、気軽に読める文章(内容)にしてほしい。
- 松木庄左衛門シリーズに感銘を受けた。
- 福井の人物シリーズ、歴史などにももう少し紙面を増やしてほしい。
- 終了した情報もよいが、事前に情報提示も計画されたら。
- 歴史コーナーで、地名の由来を特集してほしい。
- H.Pとは違うブログを導入して、地域社会や住民とのコミュニケーションを積極的に行った方がよい。

財団イベント INFORMATION

ニューヨーク ジャズ コレクション 2005	ピアニスト・リニー ロスネス ほか	6/10(金)	福井市・「響のホール」	まちづくり福井(株)主催 財団協賛 入場料2500円
げんでんふれあい コンサート 2005	「和田アキ子」コンサート	6/18(土)	福井市・フェニックスプラザ	入場料 2,000円
松原正樹 スペシャル ライブ	ギタリスト(武生市出身)	6/25(土)	福井市・「響のホール」	福井テレビジョン(株)主催 財団協賛 入場料5,000円
文化講演会	講師:清水國明(タレント)	7/2(土)	福井市・福井県生活学習館	福井県連合婦人会と共催

